白秋記念館１階　歴史民俗資料館の展示：

蒲池窯で創り出される茶道具

蒲池窯は、柳川市の蒲池地区に開窯され、伝統的な蒲池焼の作風の工程を通して復活されたものです。

ここでは、その「匠の技」と主な茶道具の作品を紹介します。

柳川市蒲池地区では、弥生土器が多く出土します。その素焼き土器の流れをくみ、表面に黒く煤（すす）が着いた文様を意図的に創り出したのが蒲池焼です。（蒲池小学校所蔵の弥生土器も展示中）

蒲池焼は、安土桃山時代に起源を持ち、大名の庇護のもとに御用窯として献上御用を勤めるなど、江戸時代に発展しましたが、明治時代には途絶えてしまいました。

昭和６２年、蒲池焼の兄弟窯ともいうべき尾崎焼（佐賀県）の技法を学んだ現窯元・土器師の伊東征隆氏が、蒲池窯跡近くに新しい窯を開きました。

「蒲池窯」で創り出されるのは、釉薬を使わず、入念な手作業で磨きあげた柔らかで温もりのある作品です。生の状態の時に椿の葉などで磨き、松の木で焚いて900度以上にならないように気をつけながら窯で焼きます。窯の名前は、空窯（キセル窯とも）と呼ばれます。

窯の上には瓦片を敷き詰めます。そして、焼いた後は開いてる場所を粘土で密封し、空気を入れず不完全燃焼させることで、重厚な色合いの土器が出来上がります。

その伝統的な技を探究・継承して、「雲華（うんげ）」「繧繝（うんげん）」と呼ばれる黒や白の斑紋があるものの復活に成功しました。

本来は偶然生まれたであろう模様を意図的

に浮かび上がらせようとした先人達の熱意と努力とともに、雲になぞらえようとした風雅・風流を愛でる先人達の趣向の素晴らしさに驚かされます。

柳川で唯一の窯元「蒲池窯」は、その独特の工程から生まれる意匠から、独自の製品づくりをしています。

茶室で使われる道具として創り出されるのは、風炉（ふろ：湯をわかす火鉢）、炮烙（ほうろく：素焼きの土鍋の一種）、灰器（はいき：炭手前のとき用いる、灰を入れる器）、火入、香合（こうごう：香を入れる小さな容器）、蓋置（ふたおき：釜の蓋や柄杓を置く道具）などがあります。

香合は、茶室でも愛玩され、炉等で焚くための香を、あらかじめ入れておくことがあります。香合の中には3個入れておき、その内2個を炭の近くに落とし入れ、薫じさせます。残り1個はそのまま拝見に回します。風炉と炉では用いる香が違うため、異なる香合を用います。

十二支の干支にちなんだ香合ですから、その制作風景が季節の風物詩として新聞などで紹介されることもあります。

また、柳川にちなんだ作品もあり、柳川凧土鈴や裸雛（はだかひな）香合も珍しいものです。

白秋が幼い時になじみ、過ぎし日を思い出して詠った「鳩笛」の再現も手がけ、その形や色使いから、かわいらしく親しみのある郷土玩具の一つとなっています。（右展示写真）

展示は３月３１日までです。

過ぎし日の幼な遊びの土の鳩
吹きて鳴らさな月のあかりに
二十年前（幼な遊び）上巻　郷土飛翔吟・夢殿
鳩笛や子らを連れゆく山路にぞ
ほろこと吹きて我はありける
高尾薬王院唱
（昭和十二年八月第三回多磨全国大会）

問い合わせ先

〒 832-0005　**柳川市西蒲池 11-1**

窯元　蒲池窯　（Tel）0944-73-0527

平成２５年は巳年ですが、蛇を嫌がる人もいるので、香合は弁財天の琵琶の中に蛇をかたどった絵が描かれています。

?